
いつまでたっても子どもでいれば

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつまでたっても子どもでいれば

【Nコード】

N7681Q

【作者名】

朝昼夜

【あらすじ】

よくわからないはなし第62弾くらい。

助けるためにその谷にしがみ付いているのだと言う。

「誰を助けるの？」と尋ねると「世界だよ」と答えてからその人は満面の微笑みをたたえていた。

嘘つきは泥棒のはじまりだといったのは自分のあまり好きじゃない大人たちの文句だったけれどその時に自分は大人に変化してみせて、瞳に光を入り込ませないようにしながら答えた、

「泥棒だね、あなたは」その言葉には冷たいものしか入り込んでおらずかといって氷なのに溶けることは無いのは一度染み込んでしまえばその内部が冷え切るから、溶けることが無いのだということだ。自分はまだ子どもなのにそのように大人に変化してみせて言っているのに、大人の姿をしているその谷にしがみ付いている人は子どもに変化してみせて「世界を助ける」と答えているのが憎たらしかったのかもしれないが、憎いという感情の本質がまだどんなものなのか見当が完璧にはついていなくて、自分の計っている基準はまったくもってたいしたことがないのではないかという疑念はそのまま自分という人間がたいしたことは無いのだという答えと直結する気分だった。

「世界は今日も危機だから本気を出して谷を壊そう。全力の心で。嘘じゃない心で」

どこまでも青空は澄み渡っていた。こんなにも良い天気なのは何年か振りじゃないのか、と感じられるほどに今日は良い天気だった。それなのに男は平然と、淡々と、しみじみとする様子はまったくみせず世界の話をしているのは格好良いというフェイントをかけただけで実際には愚かしくて嘘つきに違いないと悟った。だから天気のことなんてもうどうでも良くなって、谷にしがみ付いているおっさんの手を谷から離してやろうと閃いて、スコップを取りに家に戻った。大人たちは今日もあくせく何かに向けて生きていたが、何の

ために生きているのかハッキリとした理由もなくこだわりもなく平然と生きているのが見ていて不愉快であんな姿にはなりたくないと思わされた。スコップを持つ手はさらに力を込めていて、子どもは駆け出して、実にはやいものだった。やがて谷に再び辿り着いたときに、きよろきよろとあたりを見回してから、青空をもう一度みた。そこにある真つ青なブルーを目に焼き付けてから、ひっそりと谷にしがみついている男に、忍び足で近づいてから、その指にスコップを突き出した。男の指にスコップは突き刺さり、指は負傷して使い物にならなくなってしまったと思われる様子に変わったのは、血が噴出してひどい有様だった。子どもは嬉しい思いに駆られながら、不恰好な姿勢で不恰好な微笑みを浮かべて汚らしかつたけど果たして人間らしいや、と自分で思えたのは自分がどういう人間になりたいたのか的を得ているからだと感じることが出来た。そんなことを思いながら谷底に目を向けると、一輪の真つ赤な花がその底で咲いていて、いつまでも消えてなくなることはないようだった。世界はこれから滅んでいくのだろうか、救世主は今この手で葬って花にしてやった、と嬉しく思った子どもは村に戻って大人たちを虐殺するための計画を練ろうかと一人ほくそえんでいたのは、救世主を滅ぼしたから自分が悪魔だと錯覚していたのかもしれないが、実際的には子どもでしかなく、ただただ毎日の生活のために処理を一つ一つなしていくだけのことで、しかし問題としてあったのは自分がそのような生活を淡々とこなすことそれ自体が大人に同調しているようなものだと自分で悟れたからで、そう考えるたびに子どもは不愉快で大人にたいするアンチテーゼの自分の存在理由を深めるための行為をしなければならぬと思った。だから朝、目覚めた子どもは、ひそかに毒を仕込んで大人を殺した。その時に彼は自らの自信を深めてさらに毒を持ってこようと張り切った。

やがて日が落ちた頃になって、谷に子供はいて、そして毒を拾い上げてから村に帰ると、はたして、子どもが毒を盛る前に大人たちは全て死んでいた。火事のせいだった。なぜか大人たちは全て死ん

でしまった。見捨てられたのだ、と子どもは感じた。魔王に見捨てられた己は、悪魔として大成することは出来ないのだ、と感じたのだ。子どもは嘆きながら、燃えカスになった村を飛び出して、何かを為そうと冒険に出る。何時までも毒は胸の内を隠して、誰かにそれを手向けようと。それが存在意義。大人に対するアンチテーゼが子どもの存在理由。世界を滅ぼそうと。大人の世界を崩壊させようと。もう口火は切ったのだと。救世主を殺したあの瞬間から、と。

だから子どもの寿命は短い。子どもが子どもで無くなったときに子どもはその自らが自らに課した理由によって自らの命を絶たなければならぬかもしれない。

思いは強ければ強いほど折れた時に血潮を吹く。子どもの思いが強いのか弱いのかはまだ大人になっていないからこそわからないが、やがてその時は訪れるかもしれない。その時が少年の寿命になるのだとしたら、はたして少年はいつまで子どもでいられるのか。それとも大人になることを演じるだけで、いつまでも子どもでいるのか。それとも自らが子どもの時に課した、大人の世界を滅ぼすという不安定な存在理由を自ら否定して殺人の罪にさいなまれなくてはいけないか。理由無き殺人をしてしまったと自覚せざるを得ない。救世主を救世主としてではなくただの一人の人間だったと認められた時、その殺した理由も平凡なる快樂だったと己で認めなくてはならない。

時は止まらない。子どもは青空の中に太陽を見た。眩しすぎるそれに照らされながら子どもは砂漠を歩く。乾燥した地を歩いていく。新たな街を目指して。新たな出来事を目指して。

いつまでもどこまでも砂漠は続いていて、谷底のあった村にはもう、帰れない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7681q/>

いつまでたっても子どもでいれば

2011年2月9日03時40分発行